

ニュースを見に行く!

現場の磁力

●山藤章一郎と本誌取材班



「無縁仏」となる老人の孤独死は今日もどこかで起きている

第191回

新宿

「高齢者所在不明」の現実

父さん母さん 消えてくれてありがとう

現場データ
ファイル

家族とも故郷とも絆が切れた
「行旅死亡人」。母と子の縁を結ん
だホームレス。ふたつの話。

「おはよ」とツネ。
「あい、おはよございます」と婆さんは首を折った。
いまから2年前、2008年夏の朝5時の光景である。
ふたりはこの半年前から口をきき始め、情けの糸をむすびあつた。一緒にソープや飲食店の隙間をまわって、缶を集めようになつた。

スエ婆さんは、新宿歌舞伎町（鬼王神社）の手水で顔を洗つて「はえ」とひとつ息をほどいた。
鐵くちやだらけの86歳だが、まだ体のどこも痛くない。

職安通り近くに張つた青テントで目を覚まし、ここに来る。

鳥居をくぐると、鉢を頭に乗せた鬼と2匹の狛犬が迎えてくれる。神社の由来など知らないが、心強そうな〈鬼の王〉が守ってくれる気がして、通い始めて長い。

66歳の、歯医者代がなく前歯を5本欠かしたまま、全体が黒ずんだれっきとした老人である。

スエ婆さんは福島のダムに沈んだ村から東京に出てきた。浅草の土産物の売り子や弁当工場のパートで生きてきた。結婚歴はない。小柄だが、歩くのが速い。



現場の磁力

卷之三



全国で高齢者の所在確認が出来
ました。(不局は持つ) (不局は持つ)

沙丁鱼罐头。这次
是用生的沙丁鱼
和豆豉一起煮的，
味道非常鲜美。

（アーヴィング著「アーヴィングの死」）

死難者田口さん。死難者田口さん。死難者田口さん。
死難者田口さん。死難者田口さん。死難者田口さん。
死難者田口さん。死難者田口さん。死難者田口さん。
死難者田口さん。死難者田口さん。死難者田口さん。
死難者田口さん。死難者田口さん。死難者田口さん。

新規開拓のための海外進出を目的とした「海外進出促進法」が施行され、外國法人化による海外進出が容易になりました。

父は四歳成仏のため毎日お詫びを口にした。父の死後も毎日お詫びを口にした。父の死後も毎日お詫びを口にした。

22010年夏、通日報に載られた
100歳以上の所生不老翁は
全國で90人近くになった。
光緒は東洋遊学の第一人者。
加藤高明は日本へもして自殺
死したが、かくかくせん。

「死臭は最後に叫ぶ

1 2010年真道連日報じられた
1 00歳以上の所在不明高齢者は
全国で290人近くになつた。

「おれはこいつだ」

卷之三

西漢書

「」

六
アラモードアーバン
アーバンアラモード

• 106 •

「ウハコ。由

東京は東洋足立区の101番・
加藤源次郎と名乗る者として自署
され裏書きがある。左側の「此の書
は父の遺稿を整理して作成された
ものである」と記す。

「死臭は最後に叫ぶ
「おれははじいた」

映画『檜山節考』より
1983年公開 ©今村プロ・東映



かつたが、うまくいえなかつた。春を越せば、軽装のセーラーとシャツで行ける。ズボンと靴も新調するがそれだけのカネはこの3年で貯まつた。

「前の晩に銭湯に行こう」とツネがいうと、「んで、新幹線に乗つべ」と婆さんがしわ顔をくずれさせた。

遺骨は電車の網だなに乗せて降りた

戦後文学の最高傑作といまも位置づけられている『檜山節考』(深沢七郎 新潮文庫)は、70歳を迎える冬、山に捨てられるおりん婆さんと、せがれ辰平を描く。

貧しい村が撫とする棄老の「口べらし」である。捨てる日、雪が降れば好運だと、いい伝えがある。

散乱した白骨をカラスがつづくて登つた婆さんはおぶつ下る辰やんに、悲鳴が聞こえる。同じ村の年寄りがせがれの着物を放してなるものかと擱んでいる。

せがれは親を突き飛ばした。親は崖を転がり落ちていく。

雪がちらついてきた。

辰さんは、救われる。「おつ母あ、

降つてきたよう、運がいいなあ」

東京中野区「中部すこやか福祉センターセンター」野村建樹副所長の話。

中野区には、ひとり暮らしの70歳以上が1万6500人いる。

「なかでも認知症の人はホームレスになる率が高いです。

家や施設をふつと出ていき公園などに住み着きます。

子どものあいだを転々とさせられる親もいます。何年間は長男、

次の何年は次男と。それで行方をくらますように出ていくのです

辰さんは泣く泣く母親を山に捨てに行つた。いまは年寄りを易々と預かれない。

報道では、東大阪市の119歳

が、熱海の102歳が、長野の1

10歳らが「消えた」。そして子

らにも親を捜した気配はない。

「アカの他人だ」という者もいた。

父さん母さん、消えてくれてあ

りがどうと喰いでいるか。

親はますます、「疎遠」「行方不

明」から「絶縁」「行旅死亡人」「無縁仏」に向かう。

前出の遺品整理会社の吉田代表の体験は重い。

「あんなもん親じゃないから」

『遺品など勝手に処分してくれ』そのケースが増えてきました』

遺骨を、電車の網だなに乗せてそのまま降りる者もいる。

鐵道会社が一定期間保管したのちに合祀する。

位牌、仏壇をつくるカネ、墓を買うカネがない人の恵である。

前出・X署の捜査員もいう。

「遺体を引き取りに来て、悲しむ人など皆無です」むしろ、警察

に見つけられ連絡され、迷惑だと惜する心もいまはない。

ミイラで発見され、大騒動の発端となつた東京足立区千住の加藤宗現さんの近隣の話。

「あそこの前の名倉医院の待合室で会つたつけな。わかんねえな。

私も、俺か婆さんかどっちか倒れたらおしまいですよ」

「私は町内会副会長をやってたし、家の前も毎日通つてたが、ミイラになつちゃつたとはね。葬式を出せなかつたのかね。いまの世の中カネですよ。カネがなきゃ、子どもも面倒見やしない」

「加藤さんの隣は歯医者なの。診察台から2階の窓や雨戸が見えんのよ。いつも閉めてるの、ヘン

だなつて。それがテレビで即身成仏? それって、なに?」

急救車で搬送された先の病院で

丸4日生きて、不帰の人となつた。

最後に、ツネに「ありがとさま」と唇を動かした。

ツネさんは都の福祉保健局の

〔葬祭扶助〕で婆さんの葬式を出し、

NPOの共同供養墓に入れた。

自分も脇に入る手続きをした。

2010年の春になつた。

ス工婆さんは福島へ墓参りに行つてから、ツネさんと一緒にテントで暮らすようになった。

寝袋ではなく、せんべい布団に

たまり合えばテントも狭くない。

福島の墓は、あんずの花越しの眼下に川が流れ、県道が走り、ダム湖が光っていた。川と道を越えれば、婆さんの暮らした家に行ける。だが婆さんは、墓参りをしただけで上りの電車に乗つた。

「いいとこだつたな」

ツネは抱き合う恰好で寝る婆さんに毎晩そういった。

「いんや、こっちの方がいいんだ。おめと鬼王さんがおる」その答えも毎晩同じだった。

あれ以来、ツネは熱は出さなかつた。代わりに婆さんがある夜、テントの入り口で木が倒れるようになどくずれ折れた。

150㌘の骨と皮だけの小さい体なのに、音が大きかった。

急救車で搬送された先の病院で

丸4日生きて、不帰の人となつた。

最後に、ツネに「ありがとさま」と唇を動かした。

ツネさんは都の福祉保健局の

〔葬祭扶助〕で婆さんの葬式を出し、

NPOの共同供養墓に入れた。

自分も脇に入る手続きをした。